

南仏アルデッシュ県ローヌ川西岸流域の中世ロマネスク聖堂について —シャンパーニュ・シュル・ローヌからヴィヌザックまで—

中川久嗣 文学部ヨーロッパ文明学科教授

[研究ノート]

The Romanesque Chapels of the Department of Ardèche: From Champagne-sur-Rhône to Vinezac

Hisashi NAKAGAWA

Professeur, Département des Études de la Civilisation Européenne, Faculté des Lettres, l'Université de Tokai

Le département de l'Ardèche de la région Rhône-Alpes se situe au sud de la France, nord du département du Gard de la région du Languedoc-Rousillon et just ouest de la Drôme. L'Ardèche, se correspond au Haut et Bas Vivarais, était aussi toujours un carrefour culturel depuis l'antiquité romaine. Au moyen age, le Vivarais se couvrit de nombreux châteaux et chapelles romanes. Beaucoup de ces chapelles sont aujourd'hui ruinés, mais certaines ont conservés ou reconstruites. Je fait quelques descriptions historiques, architecturales, et artistiques sur les chapelles ou les églises du Vivarais. Ce sont Saint-Pierre de Champagne, Saint-Martin de Vion, l'abbaye Saint-Pierre de Rompon, l'abbatiale Sainte-Marie de Cruas, et Notre-Dame de Vinezac. Surtout en cas de Champagne et Cruas, on remarque les sculptures romanes magnifiques du douzième siècle sur les chapiteaux dans la chapelle ou la façade ouest de l'église. Ces chapelles se trouvent au bord du la rivière du Rhône qui attache le culture de la la Bourgogne et l'Auvergne à la civilisation de la mer méditerranée.

Accepted, Dec. 13, 2013

現在の南フランス・アルデッシュ県 (Département de l'Ardèche. 県番号 07) は、ローヌ・アルプ地方 (Région Rhône-Alpes) の南西部にあって、ローヌ川中～下流域西岸に位置する。北はロワール県、北西部はオーヴェルニュのオート・ロワール県に接しており、ローヌ川をはさんでその東岸はドローム県 (Drôme, 26) である。その最北部からリヨンまでは約 45 キロに過ぎず、さらに約 60 キロばかりローヌ川を北上すると、マコンに至り、そこはすでにブルゴーニュ地方となる。したがって、南フランスと言っても、地中海に接するプロヴァンスなどとは、文化的景観において多少とも異なる様相を呈するが、ローヌ川を挟んでほぼ南北が一致するドローム県の南部は「ドローム・プロヴァンサル」(Drôme Provençale) などと呼ばれ、プロヴァンスとの歴史的文化的関係が深いので、アルデッシュ県にあって、同様に地中海文化圏との連関は濃密である。

実際アルデッシュは、その地理的位置から見ても、今述べたように歴史的には常にローヌ川を軸としてブルゴーニュと地中海・プロヴァンスとの文化的通路であったし、その通路は、中央山塊 (Massif central) を介してではあるが、オーヴ

エルニュ方面ともつながっていた。ル・ピュイから東進すると、およそ 30 キロで現在のアルデッシュ県境に至る。

ドローム県は、ローヌ川から東に向かうと (とりわけヴァランスあたりでは) 比較的平坦な平野がおおよそ 30 キロないし 40 キロ程度続いた後、急に高度が増してフレンチ・アルプスにかかる。アルデッシュにおいては、ローヌ川から西に向かうとすぐに山地に向けて傾斜が始まる。しかしその高度は、確かにアルデッシュ東部及び南部は 1000 メートルを越える山地がちなものでも、ドロームがアルプスに接しているような急峻さ (例えばヴァランスからレオンセルにかけての急勾配などにそれが典型的に見て取れる) は感じられない。むしろオーヴェルニュや、ラングドック北部のロゼールへと、中程度の標高の高原がなだらかに連続してゆくという印象が強い。それはつまり、アルデッシュにおける中央山塊は、アルプスのような人的・物的な (ということは文化的な) 行き来の障壁をなしているわけではないということを表している。

しかしアルデッシュからロゼール (あるいはガール) にかけての高地地方は、過去から現在に至るまで、フランスの中でも人口密度が非常に低い地域のひとつである。今も触れたように、その空間的な東西軸は、アルプスに比して相対的に空間的障壁度は低いものの、やはりローヌ川に沿う南北軸こそが、歴史的に見ても文化的通路として主軸であったことには

疑問がないであろう。

アルデッシュ県は、おおよそかつての「ヴィヴァレ」(Vivarais)地方に相当する。現在でもアルデッシュ北部を「高ヴィヴァレ」(Haut-Vivarais)、南部を「低ヴィヴァレ」(Bas-Vivarais)などと呼ぶ。古代末期5世紀中頃には西ローマ帝国にかわってブルグント族がこの地域において勢力を持つが、「低ヴィヴァレ」あたりから南は西ゴート族の勢力圏に含まれた。西ゴートがその都をトゥールーズからトレドに移す6世紀半ば以降はフランク王国に統合され、一時8世紀にイスラムの侵略を受けつつ、9世紀に入るとロタール1世の中フランク王国、さらに870年のメルセン条約以降は西フランク王国に属した。ただし、この時期のローヌ川中～下流域の国境は複雑で、ヴィヴァレの一部は、北はブルゴーニュから南はプロヴァンスまで支配したブルグント王国(別名アルル王国)に含まれていた。しかし11世紀にはブルグント王国が神聖ローマ帝国に吸収され、名目上は神聖ローマ帝国皇帝がこの地の宗主権を獲得した。12世紀の、プロヴァンスを巡るトゥールーズ伯とバルセロナ伯の間の争いは、ヴィヴァレにはあまり及ばなかった。その間、ヴィヴィエ(Viviers)司教の管轄となるが、14世紀にブルゴーニュ公の支配をへて、シャルル5世がフランス王国に編入した。なおヴィヴィエ司教は、ヴィヴィエのみならず、ラルジャンティエール(Largentière)やドロームのドンゼール(Donzère)の封建領主であり続けた。

ヴィヴァレは、現在とは異なり、フランス革命期まではラングドックに含まれていた。実際、アルデッシュ県は南側が、ラングドックのガール県と接していて、その時々政治的・行政的区分に関わりなく、ガールとはやはり密接な文化的結びつきを持っている(ヴィヴァレの一部はまたドーフィネにも含まれていた)。

以下では、このようにフランス南東部において、ローヌ川に沿って一種の濃密な文化的バンドを形成するヴィヴァレ(ローヌ川西岸地域)を取り上げ、「高ヴィヴァレ」から「低ヴィヴァレ」の、およそ10世紀から12世紀を中心とした中世期におけるロマネスク聖堂の展開を、そのいくつか主要なものに関して検討を加えたい。

1. シャンパーニュ、サン・ピエール教会 (Église Saint-Pierre, Champagne)

シャンパーニュ(またはシャンパーニュ・シュル・ローヌ)は、アルデッシュ県最北部のセリエールとアンダンセットの中間に位置する。この村は、11世紀にはローヌ川をはさんで対岸のアルボン伯領(comté de l'Albon)に属し、伯はここに城塞を建設していた。サン・ピエール教会は、村のほぼ中心、現在の県道86号線(D86)に面してその東側に建つ。12世紀には現在のイゼールにあるベネディクト派のサン・シェフ(Saint-Chef)修道院に属する小修道院(Prieuré)であった。ル・ピュイやサンティアゴ・デ・コンポステーラへ向かう巡礼がローヌ川を渡る地点でもあることから、多くの人々がこの修道院を訪れた。14世紀には修道院自体は取り壊され、残された教会はヴィエンヌ大司教の所有となった。

サン・ピエール教会は、12世紀半ばのものである。西ファサードも含めて、その建築の全体的な重厚感は、どちらかと言うとロマネスク教会と言うよりも、むしろ要塞のような印象を与える。巨大な西ファサードには、大きな三角形の切り妻が載り、まるで近世以降のプロテスタント寺院(temple)であるかのような印象さえ与える。16世紀の宗教戦争期にかなりダメージを被り、ロマネスク期の記憶は、3つのポーチの上部に残る彫刻のみである。

西ファサードの3つのポーチの上には、それぞれ中央部が高く両側に向けて傾斜が付けられているリントルが載っている。そのリントルのさらに上には縞模様で半円形のアーチ(ヴァシュール)が付けられているが、そのアーチの内側に彫刻が残るのは中央のポーチのみである。

中央のポーチのタンパンの構成は、上部に「キリストの磔刑」(La Crucifixion)、下部に「最後の晩餐」(La Cène)である。ともに摩滅が進んでいる(とりわけ人物の顔は判別不可能である)が、残された繊細な線を読み取ることはできる。「キリストの磔刑」は、タンパンの彫刻としては比較的珍しいものであるが、その構図は、ラングドックのサン・ジル・デュ・ガール(St-Gilles-du-Gard)やサン・ポン・ドゥ・トミエール(St-Pons-de-Thomières)の西ファサードのタンパンのそれを想起させる(ただし、サン・ポン・ドゥ・トミエールのは、「キリストの磔刑」「最後の晩餐」が、上下ではなく水平に並べられている)。またシャンパーニュでは「最後の晩餐」

の、横長の食卓にかけられたテーブルクロスのはだの様子が、ことさらによく残されている。その食卓にはキリストを含めて13人が座っている。そのうちの一人はキリストに左側から抱きついて見えるように見える。こうした「最後の晩餐」の構図は、また同時に、この地方のロマネスク文化に対するブルゴーニュからの影響を感じさせるものである。プロヴァンスのボーケール（現在はガール県）にあるノートル・ダム・デ・ポミエ教会（Notre-Dame des Pommiers, Beaucaire）の東壁上部にも同様にロマネスク様式の精緻な「最後の晩餐」のフリーズがあるが、時代はシャンパーニュのものよりも下る。

シャンパーニュの西ファサード左側のポーチのリンテルには中央にイエスがいて、その両側にイエスから冠を受ける二人の人物がひざまずいている。この二人はペテロとパウロであるとされるが、他方神聖ローマ帝国皇帝とカペー王家のフランス国王ではないかとする見方もあるようである。右側のリンテルでは、イエスを表す羊が光輪の中におり、その光輪を両側から大天使ミカエル（左）と天使カブリエル（右）の二人の天使が支え掲げている。

その他、西ファサードの壁面には、翼や竜の尾を持つライオンあるいは馬のような頭を持つ動物たち（中にはスフィンクスのように頭が人間というものもある）、ハーブで音楽を演奏する人、人間の顔（頭）、などの断片が埋め込まれている。西ファサード以外にも、聖堂南壁には、古代のバックスを思わせる髭を生やした人物の顔、戦う騎士たち、投石具を持ったダヴィデ、牛、ライオン、羊などが見られる。多角形の後陣（内部は半円形）および北側の持ち送りには、植物のフリーズ、そしてフクロウその他の鳥や動物が彫られている。さらにトランセプト北側の塔に付けられた小ポーチには、アルデッシュやドロームでしばしば見かける二つ並んだ人間の顔や、相対峙する二人の人物の姿（かなり摩耗している）の彫刻が埋め込まれている。

シャンパーニュのサン・ピエール教会の平面プランは、イゼールのサン・シェフ（Saint-Chef）修道院附属教会のそれと比較される。とりわけ後陣が類似している（多角形の外面と半円形の内面の形状）。聖堂内部は、身廊の両側に側廊がついた三廊式で、内陣には6本の円柱に支えられた小アーチによって後陣回廊（déambulatoire）が構成されている。これはこの地が巡礼ルートで重要な位置にあったことの証左である。トランセプト交差部より西の身廊は、大きな横断アーチ

によって区切られた5つのスパン（梁間）を持ち、その5つのスパンの上には、それぞれ4角をトロンプに支えられた3つのクーポールが載っている。すなわち、西の2つのクーポールは、正方形をなしてそれぞれ2つのスパンの上に載り、身廊の最も東のクーポールはスパン1つに対応した長方形である。またトランセプト交差部の上にもやはり長方形のクーポールが1つ載っている。これら合計4つのクーポールには、あたかもトリビューンのごとく、小円柱のついた2つないし3つのアーチからなる開口部が並んでいる。このようなクーポールの構成は、ル・ピュイのノートル・ダム大聖堂（Cathédrale de Notre-Dame du Puy-en-velay）との類似性が指摘される。これはやはり、ル・ピュイとこの地を結ぶ巡礼ルートの関連が強いと思われる。とにかくもシャンパーニュでは、大きな壁面を持つ西ファサードから内部に入ると、そこは一転して半円形アーチの連続と後陣を形作る円柱の配置、そして均整の取れたクーポールの連続する身廊の全体が、ロマネスク様式特有の美しさを保持していて、その印象の違いにとりわけ驚かされるのである。（Fabre-Martin 1993, Nougaret et St-Jean 1991, *RIP. GBV.*）

2. ヴィオン、サン・マルタン教会（Église Saint-Martin, Vion）

ヴィオン（Vion）は、シャンパーニュからアンダンスを経由して南に約18キロのところを位置し、村の南側の小山の中腹に、この村を見おろすようにサン・マルタン教会が建っている。逆に村から見上げると、放射角状に付け柱の付いた方形の後陣（abside）、それををさんで北側と南側で高さの異なる二つの小後陣（absidiole）のついたトランセプト、最上部に小アーチの列とその下の階にはそれより大きな二つのアーチの開口部を持つ方形の鐘楼、これらが山の中腹という地形的な条件によって比較的高さを持ちながら一体となって建っているのが分かる。しかしそれらのうちロマネスク期（12世紀）のものは中央の後陣のみであって、内陣ならびに身廊部分は19世紀に再建されたものである。実際、3廊式で3つのスパンからなる内部も、壁や柱、ヴォールト、横断アーチなど、すべて近年になってから新たに彩色されたこともあって、古さを感じさせるものはない。ただし、後陣の柱頭彫刻については彩色されてはいるが、中世期にさかのぼることができる

かも知れない。8葉あるいは9葉のひな菊（マーガレット）模様はオーヴェルニュからの影響が認められるし、シャンパーニュの西ファサードに見られた彫刻と同じモチーフのものも見いだせる（神の子羊を掲げる二人の天使など）。

問題は身廊中央の入口から階段でさらに下に数段降りたところにある、後陣の真下に位置する地下クリプトである。半円形のヴォールトの下に、6本の小円柱に支えられた5つの小アーチが並ぶ。小円柱の柱頭部の彫刻は、プレ・ロマネスク期のもので、シンプルな植物文様や西ゴートを思わせるパルメットなどである。クリプト自体がカロリング時代のもと思われる。ヴィオンは、シャンパーニュの場合と同じく、10世紀頃からローヌ対岸のアルボン伯の支配下にあった。その後12世紀に、リヨンのサン・マルタン・デネイ修道院（Abbaye Saint-Martin d'Ainay）のベネディクト派修道士たちがサン・マルタン教会（19世紀に解体）を建てたが、これらの柱頭彫刻は、12世紀以前（おそらく11世紀頃）にここに建てられていた初期の教会のものであると思われる。クリプト中央にはやはり11世紀の、がっしりした洗礼石盤がある。（Fabre-Martin 1993, Nougaret et St-Jean 1991, Peyrard 1976. *RIP.*）

3. ル・プザン、ロンポンのサン・ピエール修道院（Abbaye Saint-Pierre de Rompon, Le Pouzin）遺構

別名ヴェー・ロンポンの「オ・シェーヴル女子修道院」（Couvent aux chèvres, Vieux Rompon）とも言う。ヴィオンからトゥルノン・シュル・ローヌを経てさらにローヌ川に沿って南下し、エイリュエ山地の南端に達するところに位置する。ローヌから県道104号線（D104）によってプリヴァスと結ばれる交通の要所で、古代にはやはりアルパとヴァランスを結ぶルートとローヌを行き来するルートの十字路にあたった。サン・ピエール修道院の遺構は、ル・プザンの北側のローヌ川を見下ろす山腹にある（標高300メートル）。現在ローヌ川河岸方面からの直接のアクセスは無理で、ル・プザンからいったんヴェー・ロンポン（この山腹にも古い小礼拝堂がある）を経由して東側からダートの細い山道を進むしかない。

もともとこの場所には4世紀から6世紀にかけて、メロヴィング朝時代の城塞があった。10世紀にクリュニー修道会が

サン・ピエール修道院を建設した。そこには礼拝堂や修道士たちの住居、食堂などが備わっていた。最盛期は12世紀から13世紀で、この修道院自身が小修道院を持ち、ヴィヴィエ司教区の中でも強い勢力を保持していた。その後、百年戦争期に一部破壊されたが、他のクリュニー修道会のものに比べると被害は少なかったと言われ、15世紀まではなお修道院として機能していた。しかし宗教戦争の時代から大革命期にかけて荒廃が進み、ついには放棄された。

現在残るのは、サン・ピエール修道院附属教会の南側の壁の一部と、東に向けた後陣の壁のわずかにカーヴを描く基礎部分のみである。後陣のヴォールトは、最近までアーチ状の一部が残っていたが、1998年の積雪の際にそれも崩壊した。図像的に見るべき装飾や彫刻の類はまったく残されていないが、クリュニーの勢力がヴィヴァレに拠点としていた修道院であり、ブルゴーニュとこの地方の強いつながりを物語る遺構である。（Esquieu 1969, Fabre-Martin 1993, *RIP.*）

4. クリュアス、大修道院附属サント・マリー教会（Abbatiale Sainte-Marie, Cruas）

クリュアス（またはクリュア）は、プリヴァス（Privas）のほぼ東、ローヌ川をはさんでドロームのモンテリマール（Montélimar）の対岸の少し北に位置する。古くからローヌ川を渡河する際の要所のひとつであった。サント・マリー教会は、アルデッシュ（ヴィヴァレ）におけるロマネスク期の聖堂としては、最も規模が大きい部類に入り、柱頭彫刻などの外部と内部の装飾類が豊かに保存されている。

クリュアスにベネディクト派のサント・マリー修道院が最初に作られたのは804年のことである。その後11世紀半ばから12世紀にかけて現在の姿に改築された。現在残る最も古い部分はトランセプトと後陣部分、そして北側の壁の一部が11世紀のものであり、その他の部分は12世紀のものである。宗教戦争の時代に修道院自体は破壊され、現在は附属教会のみが残る。

教会を東側から見ると、後陣の上にロンバルディア帯で装飾された2段構えの円形の頂塔が立つが（最上段のものには小円柱に支えられたアーチの開口部が付けられている）、その地上からの高さにもかかわらず、南北のトランセプトが巨大で長いために、全体として非常に安定感がある。半円形の

後陣は、その両側にやはり半円形の小後陣が並び、そのすべてにロンバルディア帯がつけられている。一方、西ファサードの上には方形の鐘楼が立ち、その作りはおおよそ5段構えで、上から2段目は3本の小円柱に支えられた2つのアーチの開口部、上から3段目はそれよりも若干大きな半円アーチ（一部がニッチ）がつく。ファサードのポルタイユの上は、鐘楼の土台に当たるが、高さは身廊の天井部と同じで、「手裏剣」様の装飾を持つ円形の窓があげられている（東の頂塔の土台部分にも同じような窓が見られる）。教会の北と南の外壁上部はやはりロンバルディア帯で装飾されている。北壁には開口部がまったくないが、南壁には一定間隔で半円アーチの窓がつけられている。

内部は3廊式である。中央の身廊（その両側には高さの低い側廊がある）は、高さのある半円筒ヴォールトで、横断アーチによって5つのスパンが連続する。最も西側は鐘楼の下にあたり、2階部分に上部礼拝堂がある。したがって、その下は一種のナルテクスとなっている。最も東のトランセプト交差部の上にはひしゃげた円形のクーポールが載り、4隅を扇形の大きなトロンプが支えている。

西のポルタイユから入って奥の4番目と5番目のスパンに12世紀のトリビューンがある。このトリビューンの下は、東西に3列からなる小円柱が並び（1列に5本）、それら計15本の小円柱は、交差リヴのついたヴォールトを支える（スパンの数は8つ）。そこに見られる柱頭彫刻は、多少とも近年の修復の手が入っているのではあろうが、保存状態もよく精緻である。下から吹き上がる植物の葉、唐草文様、エサをついばみ羽を広げる鳥たち、両耳を蛇にかまれた人物の顔、パルメット、ライオン、そしてローヌ川の水運を連想させる船のロープ様の装飾など。またヴォールトのリヴの交差部には、やはりライオンやパルメットが彫られている。

そのトリビューンの東には有名なクリプトがある。ちょうどトランセプト交差部および後陣の下にあたり、南北に長い長方形の形をしている。両側の壁と中央に柱が並んでいて、リヴのない交差ヴォールトを支えている。このクリプトの柱頭彫刻は、11世紀から12世紀にかけてのもので、実際にそのシンボリックなモチーフといい、シンプルな形状といい、非常に古さを感じさせる。中央に星（あるいは花）のある円環、植物の葉に囲まれた車輪、回転する渦巻きの輪（スクリュウ）、細縞模様の植物の葉、イヌのような獣（あるいはオオカミ）、

ニワトリ、四角い箱状模様（家あるいは神の国か?）、そして有名な「オラント」（祈る人）など。この最後の「オラント」は、丸い両目を見開きながら両手を大きく広げたポーズをしている。表面がつるつるしていて、長年にわたって礼拝者・巡礼者たちによって触れられてきたものであることが分かる。これらの柱頭彫刻には古きケルト文明の残滓や、古代から続くモチーフ、さらに中世期のオーヴェルニュからの文化的影響も認められるという。ここに見られる渦巻き状の円環などは、確かにキリスト教の教義や神学以前の、人間ならびに自然の生命の躍動、大地の大いなるエネルギー、時を動かす神秘的な力、そしてそうしたさまざまなものを表現しようとする想像力の存在を感じさせるのである。（Fabre-Martin 1993, Morel 2007, Nougaret et St-Jean 1991, Saint-Jean 1977, Peyrard 1976, Tardieu et Hartmann-Virnich 1992, *RIP.*）

5. ヴィヌザック、ノートル・ダム教会（Église Notre-Dame, Vinezac）

ヴィヌザック（Vinezac）は、オブナス（Aubenas）から現在の県道104号線（D104）で南に約15キロ、さらに県道423号線（D423）を西に約2キロ入ったところにある小村である。ノートル・ダム教会は村のほぼ中心に位置し、背の高い後陣を県道側に向けている。第一印象はあたかも城塞のような壁面である。5角形の後陣の各面には、それぞれ左右に小円柱がつけられた半円形アーチの開口部（窓）が並んでいる。その開口部から後陣の頂頭まで壁面が続くので、後陣全体の高さが非常に高く見える。後陣頂頭部には銃眼様の細長い開口部が見える。後陣の高さはおよそ10メートルである。左右両側には東側から見ると一見トランセプトのごとき建物が建っているが、これは17世紀のもので、3つのスパンからなる単身廊部分が中世13世紀のものである。一番西のスパンの上に建つ大きな長方形の鐘楼（4隅にガーグイユがある）は18世紀に造られた。一番東の、ほぼ正方形のスパンの上にはトロンプを含めて8角形のクーポールが載り、その上は18世紀の小鐘楼である。

身廊内部および後陣にはロマネスク様式の柱頭彫刻が見られる。アカンサスのコリント式柱頭に、人物やライオンその他の動物、鳥などが登場する。ライオンは口バを食べている。また大きな花（ヒナギク）の横にたたずむ天使もいる（天

使の顔は欠けてしまっている)。最もユニークなのは、身廊に保存・展示されている浅浮彫りの大きな「ライオンの穴の中のダニエル」である。この彫刻は、横 82 センチ、縦 48 センチ、厚さが 16 センチの石版で、もとは教会ポーチのリンテルであったと思われる。ダニエルとおぼしき人物は「オラント」(祈る人)のように、両手を大きく広げており、その左右両側をライオン(あるいはオオカミのような獣)にはさまれている。人物の表情や獣の姿は、仰々しくもユーモラスであり、見る者(少なくとも現代のわれわれ)の心を思わず和らげてくれる微笑ましい「オブジェ」であると言えよう。

ヴィヌザックの教会は、史料「Charta Vetus」によって 8 世紀までその存在が遡れるが、明確に確認されるのは、13 世紀(1255 年)に、ヴィヴィエ司教 Arnaud de Bogüé とヴィヴィエのカテドラル聖堂参事会とのやりとりを記した史料の中においてである。その後 14 世紀(1387 年)には、村の城壁建設に関する文書の中にこの教会についての言及が見られる。さらに 15 世紀にこの地の領主たちが交わした文書にも登場する。ヴィヌザックの領主は、この近隣において一定の影響力を持ったようで、16 世紀(1584 年)には、シャシエール(Chassiers)の黒色苦行会の設立に関与している。(Fabre-Martin 1993, Rouvière-Gobrechts 1986, *RIP*.)

参考文献と略記号

- Esquieu, Yves. (1969) *Les anciennes églises d'Alba. Étude historique et archéologique*. I.B a Lyon.
- Fabre-Martin, Claudiane. (1993) *Église Romanes oubliées du Vivarais*. Les Presses du Languedoc.
- Morel, Jacques. (2007) *Guide des Abbayes et Prieurés en région Rhône-Alpes*. Autre Vue.
- Nougaret, Jean. et Saint-Jean, Robert. (1991) *Vivarais Gévaudan Romans*. Zodiaque.
- Peyrard, Maurice. (1976) *L'Église de Vion*. Collectif, *Architecture Religieuse dans la Drôme. Études Dromoises*. L'Association universitaire d'Études Drômoises.
- Rouvière-Gobrechts, Mireille. (1986) *L'Église de Vinezac*. Collectif, *Architecture ancienne et urbanisme en Ardèche, Actes du colloque de Vinezac, Mémoires d'Ardèche et Temps présent*, La Manufacture, 1986.
- Saint-Jean, Robert (1977) Cruas et le Monastier de Vagnas, Deux grands chantiers medievaux, *Archéologia*, no.109, 1977-08.
- Tardieu, Joëlle et Hartmann-Virnich, Andreas (1992) *L'Abbatiale Ste-Marie de Cruas*, Congrès Archéologique de France.
- RIP* : Renseignements ou Informations sur Place.
- GBV* : Guides ou Brochures de Visite.